トンプソンと超越論的論理学

村井忠康（沖縄国際大学）

2020年10月11日（日）
日本科学哲学会第53回大会A会場WS
「超越論的哲学はなぜ論理形式を問題とするのか」

1

1. はじめに

2

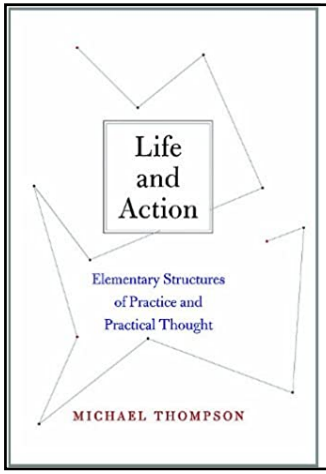
内容

1. はじめに
2. *Life and Action* の概略　Michael Thompson
3. 見落とされてきたフレーゲとの距離
4. 超越論的論理学のひとつの試み　Sebastian Rödl
5. おわりに

3

2. *Life and Action* の概略

4



Life and Action (2008)

- 主題： 倫理学（実践哲学）
- 生命がなければ行為はなく、行為がなければ慣行（practice）もない。
- 倫理学のためにいったん倫理学から行為論（哲学的心理学）へと撤退するというアンスコム路線の徹底化

Intention

LA, pp. 5-6

序論 （フレーゲ的方法論によるアリストテレス主義の表明）
第一部　生命論
第二部　行為論
第三部　慣行論　　＊社会的慣行

5

トンプソンのいうフレーゲ的方法論

- 判断あるいは思想の形式についての哲学的反省によって、われわれが「「純粋な」あるいはアプリオリな概念」を所有していることを明らかにする。
- こうした概念は、［何かが何かで］〈ある〉のカテゴリー／形式を捉える。

"*forms of being*—forms, that is, of something's being something, or (in the relational cases) of some things' being something"(*LA*, p. 18)

➢ 対象の概念：　対象カテゴリー
➢（一階）概念の概念：（一階）概念カテゴリー
➢ 二階概念の概念：　二階概念カテゴリー
➢ 関係の概念：　関係カテゴリー　　etc.

6

フレーゲ的方法の適用の拡張

life-form　　event- or process-form

- 生命形態（≒ 種）や出来事プロセス形相（の限定 ≒ 行為タイプ）、慣行などの概念も、フレーゲに反して、（フレーゲ的）対象や（一階）概念、二階概念、関係などの概念と同じ身分、つまり、アプリオリな論理的身分をもつ。
- 判断形式についての哲学的反省によって、われわれが所有していることがわかるアプリオリな概念の中には、生命形態のような非フレーゲ的カテゴリー／forms of beingを捉える概念が含まれている。

「われわれは経験とともに概念〈生命形態〉を実際に所有するようになるのだとしても、その概念が経験から生じると考えられる必要はない。その概念の内容は、思想あるいは述定のいくつかの可能性を反省することで与えられる［より適切には、解明される］のである。」（*LA*, p.20）

このアプリオリズムは、トンプソンの批判者も擁護者も視野に入れておかねばならない。

7

例

- 生命論：　自然誌判断（を表現するアリストテレス的定言文）
  ボブキャットは春に子を産み育てる。
- 行為論：　未完結相の行為判断
  太郎は道路を渡っている／いた。
- 慣行論：　性向（徳）や慣行に関わる判断
  太郎は律儀である。
  彼らは約束を守る。　　＊慣行論については、以下では割愛。

8

判断形式についての反省（1）

- 自然誌判断〈ボブキャットは春に子を産み育てる〉は、独特の一般性と時間性を示す。
  - (i) 例外を許容する。
    - 雄のボブキャット、妊娠しなかった雌のボブキャットetc.
  - (ii) 遍時間的である。→ 例示判断(judgment of exemplification)の文脈

Rödl(2012)
荒畑(2018)

ボブキャットは春に子を産み育てる。
―― たとえば、このボブキャットは去年の春に子を産み育てた。

- これらの特徴は、フレーゲ的な一般性（全称量化）では捉えることができない。

"The natural historical judgment registers a novel and un-Fregean shape that something's being something can take."(*LA*, p. 20)

9

判断形式についての反省（2）

- 三つの行為判断
  - (i) 太郎は道路を渡っている。
  - (ii) 太郎は道路を渡っていた。
  - (iii) 太郎は道路を渡った。
- これらの判断の違いを捉えるには、テンスだけでなくアスペクト（相）に訴えることが必要である。→ 進行中の行為による行為の説明の重視
- これらの判断は、少なくとも、「太郎」と「道路を渡る」によって表現される二つの要素を共有している。フレーゲ的アプローチでは、この構造を尊重した分析ができない。→ 判断の内容ではなく形式としてのアスペクト

"[We] have to do in such judgments with three distinctive but coeval forms of thought or predication."(*LA*, p. 22)

10

判断形式からカテゴリーへ

自然誌判断、行為判断の独特の形式についての反省によって、アプリオリな概念として、概念〈生命形態〉、概念〈出来事プロセス形相〉が取り出される。

判断形式 → 純粋な概念 （アプリオな概念／形式的概念）
→（forms of beingとしての）カテゴリー

- ➢ 自然誌判断において、「述定されるもの」（ex. ボブキャット）によって占有されるカテゴリー： 生命形態
- ➢ 三つの行為判断において、「述定するもの」（ex. 道路を渡ること）によって占有されるカテゴリー： 出来事プロセス形相

11

注意

- ここでは、トンプソンの自然誌判断論や行為論の細部を紹介・検討することはしない。ただし、次の点は断っておく必要があるだろう。
- トンプソンには、総称文や行為文の形式意味論的研究へ寄与する意図はない。

➢ 自然誌判断論と形式意味論との距離について：
Christopher Campbell, *Form without Formalism*, 2002
Bernhard Nickel, *Between Logic and the World*, 2016

➢ アスペクト概念導入について：
トンプソンは、アリストテレスに源流にもちながらも行為論の本流で忘れられてしまったアスペクト概念を、哲学に取り戻そうとしている。

12

3. 見落とされてきた フレーゲとの距離

13

述定の形式

- トンプソンは、概念記法の$\phi(\xi)$, $\psi(\xi, \zeta)$, $\Phi_\alpha\phi(\alpha)$のようなギリシア文字列の用法の一つを述定の形式を表すものとして理解している。
- これは、フレーゲにおける関数と項を表層文法上の述語と主語の位置に乱暴に押し込めているように見えるかもしれない。
- しかし、トンプソンのいう述定の形式とは、「一つの思想が何かについての（or いくつかのものについての）思想であることがとりうる形式」（*LA*, p. 22）、すなわち思想／判断の統一形式のことである。したがって、述定の理論としてフレーゲの関数・項-分析を理解するとは、それを思想／判断の統一形式を捉える理論のひとつとして解するということである。Cf. Campbell (2002), pp. 29-30.

14

述定の形式（続き）

- フレーゲのこうした読み方は、「一つの具体的な思想の多様なフレーゲ的分析は、それぞれ、単一の述定的要素と、それが付け加わる一つ以上の要素を取り出すことによって表現されるという論点」に反するものではない（*LA*, p. 17）。

  No one thing need be “the” subject or “the” predicate of a given thought. (*Ibid.*)

- その上でトンプソンは序論の最後において、「私が述定と呼んでいるものへのフレーゲ的アプローチの根本的特徴」の限界、すなわち、関数・項－分析で自然誌判断などに取り組むことの限界を指摘する（*LA*, p. 22）。

15

トンプソンの方法論の分節化

（1）フレーゲ的方法論： 判断形式（述定形式）から
　　アプリオリな概念を経てカテゴリー／forms of beingへ
（2）フレーゲ的な述定理論（の核）： 関数・項-分析

要するに、トンプソンは（1）にとって(2）が本質的ではないと考えているからこそ、彼が概念記法の拡張と考えている部分（自然誌判断論など*LA*の本論）において（2）を手放すことができると思っている。

16

カント的方法論へ

- しかし、トンプソンの方法論がこのように分節化されるなら、彼が従い続ける（1）をフレーゲ的と呼ぶことは、彼の関心事であるタイプの判断の形式を取り出すさいに彼が（2）を保持し続けている印象を与える点でミスリーディングである。

  この種の指摘をしているのは、私の知るかぎり、 Campbell(2002, Ch. 3)と Nickel(2016, p. 46, n28)のみである。

- 実のところ、方法論（1）の別の形容はトンプソン自身が用意している。これまでの用語法からおそらく想起させていただろうように、それは「カント的」という形容である。

"I think my argument does turn precisely on forms of reflection that were traditionally brought under that heading["logical"], certainly in Frege and Kant."(*LA*, p. 14)

17

4. 超越論的論理学の ひとつの試み

18

超越論的論理学の導入

- とはいえ、ここでいうカント的方法論は、カントの一般論理学のことではない。
- 一般論理学の用意する判断形式は、対象との関係を捨象された「単なる思考形式」である。

  当然ながら、「フレーゲ的」という限定はない。

- トンプソンが目を向けるべき、あるいはじっさいに目を向けているのは、「対象とアプリオリに関わる純粋悟性概念」（A79/B105）を用意できる超越論的論理学である。

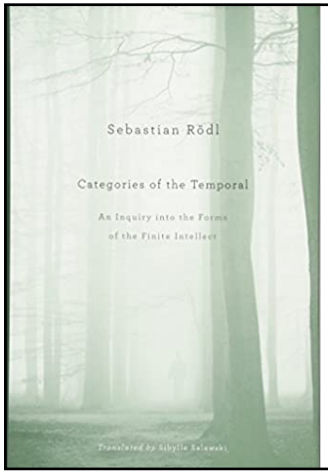
"If there is anything in the approach I adopt, it will follow that concept like *life*, *life-form*, *action*, *practical disposition*, *social practice*, etc., have something like the status Kant assigned to "pure" or *a priori* concepts."(*Ibid.*)

19

レードルの試み

- Sebastian Rödlは、*Kategorien des Zeitlichen/Categories of the Temporal*において、トンプソンの仕事（*LA*本論の元になっている既発論文）も踏まえつつ、どちらかといえば、実践哲学ではなく理論哲学の領域で、大胆にも超越論的論理学の復権を試みた。
- ただし、この試みは、カント解釈というよりはカントの再構成を通じた超越論的論理学の提案である。
- たとえば、通常、カントにおいて一般論理学は超越論的論理学に先立って理解できるものと解釈されるが、レードルはこの標準的解釈に与しない。

20



Categories of the Temporal : An Inquiry into the Forms of the Finite Intellect (2012)　独語原書(2005)

英訳には、本人監修のもと修正や拡張が施されている。誤訳か改悪なのか判断がつかない箇所もあるのが悩ましいが、、、

- フレーゲ論理学（演繹的論理学）vs. 超越論的論理学
- 超越論的論理学は、直観（において与えられる対象）との関係を思考（判断／思想）の論理形式とする。
- 時間的思考の形式

  述定形式としてのテンスとアスペクト

  総称的思考（遍時間的思考）

  自然誌判断だけでなく、〈石は地面に向かって落ちる〉、〈木は燃える〉などの物理的・化学的判断も含む。

要約的論稿："Logical Form as a Relation to the Object" (2006)

21

レードルによるカントの再構成

- 直観の形式（時間）と思考の形式（判断形式／述定形式）との協働という、超越論的演繹（および図式論）でのカントの考えを読み解くことを通じて、述定形式そのものを「時間化」する。
- テンスやアスペクト、遍時間性としての総称性を述定形式として取り出し、それらについてのみの反省を通じて、実体や状態、運動形相や実体形相といった、〈時間的なもの〉のカテゴリーに至る作業が、「原則論」（とくに経験の第一類推と第二類推）の解釈を通じておこなわれる。

運動形相：トンプソンの出来事プロセス形相に相当

実体形相：トンプソンの生命形態がその限定となるような、より一般的なカテゴリー

22

レードルのトンプソン批判

「状態とフレーゲ的「概念」の区別は、暫定的に次のように表現できる。「N.N.は神の存在を信じている」と「M.M.は神の存在を信じている」は別々の人物を指示しているが、同じフレーゲ的概念を指示している。対して、「N.N.は神の存在を信じていた」と「N.N.は神の存在を信じている」は同じ人物と同じ状態を指示しているが、フレーゲ的「概念」への指示を共有しない。」(*LA*, p. 122, n4)

- レードルによれば、ここでトンプソンは、フレーゲ的概念を状態+テンスとして理解している。← テンスは判断形式ではなく判断内容として登場している。
- しかし、状態とフレーゲ的概念を区別する方法としては、これは不十分である。　*CT*, pp. 133-4

23

交わらない二つの原理

- 〈SはAであった／ある〉という思想が、フレーゲ的な対象と概念へと分節化されるのは、それが他の思想と演繹的関係に立つかぎりにおいてである。

  → しかし、この場合、思想の諸要素のうちに実体や状態のような、それ自体で時間的なものは登場しない。

- 〈SはAであった／ある〉という思想が、実体と状態へと分節化されるのは、それが直観と関係するかぎりにおいてである。

  → この場合、現在と過去というテンスが述定形式の違いとして捉えられることにより、時間的なものの純粋概念として実体概念と状態概念が手にされる。

24

逆向きの徹底化

- 要するに、レードルからすれば、トンプソンはフレーゲ的カテゴリーとカント的カテゴリーを「同じ表」にあるものとして考えるという間違いを犯している。 *CT*, p. 134, 154.
- この観点からすれば、トンプソンが、フレーゲ的方法論を採用すると表明しながら、たとえば、アスペクト（相）の違いを示す行為判断の領域に入った段階で、関数・項－分析、したがってフレーゲ的な演繹的推論関係への依拠を自身の方法論から外すのは、手遅れである。
- よって、レードルの指摘を受けて、トンプソンの方法論をいわば逆向きに徹底させるなら、初手から彼の方法論はフレーゲ的ではなくカント的でなければならない。

25

5. おわりに

26

レードルとの比較からの教訓

- トンプソンが判断形式（とりわけ述定形式）に着目する自身の方法論について語るとき、彼は、それをフレーゲ的と称すると同時に、判断形式と「「純粋な」あるいはアプリオリな概念」との結びつきを見るカント的伝統を強く意識している。
- このことから「カント－フレーゲ的伝統」という呼称を作り上げ、さらに、それを「広い意味での超越論的論理学の伝統」と言い換えたくなるかもしれない。
- しかしこれは、トンプソンとフレーゲの距離を測り損ねたときに生ずる誘惑にほかならない。

27

参考文献

荒畑靖宏,「存在とアスペクト－時間形式をめぐるハイデガー ・トンプソン・レードル 」『現代思想　ハイデガー』2018年2月臨時増刊号, 283-294頁.

Campbell, Cristopher. *Form without Formalism*, PhD diss., University of Pittsburgh, 2002.

Kant, Immanuel. *Kritik der reinen Vernunft*, 1781/1787.

Nickel, Bernhard. *Between Logic and the World: An Integrated Theory of Generics*, Oxford University, 2016.

Rödl, Sebastian. *Kategorien des Zeitlichen: Eine Untersuchung der Formen des endlichen Verstandes*, Suhrkamp, 2005.

－－－－. “Logical Form as a Relation to the Object”, in J. Conant(ed.), *Analytic Kantianism*, *Philosophical Topics*, Vol. 34, Nos. 1&2(2006): 347-370.

－－－－. *Categories of the Temporal: An Inquiry into the Forms of the Finite Intellect*, Harvard University Press, 2012.

Thompson, Michael. *Life and Action: Elementary Structures of Practice and Practical Thought*, Harvard University Press, 2008.

28